《ササギ豆の好きなオドの話》

むかし裏町にササギ豆を煮たのが好きなオドがいた。このオドはムッツリして口が重く、モグモグして早く話せない。体が大きくて力もあり、なかなかの働き者だったが、口と同じで動作もノロくて、ノロマと思われていたが、心のよいオドだったのでみんなに好かれていた。

ある日、親類の法事によばれて出かけた。つとめがすんでお昼のお斎でお膳にすわった。見ると沢山のごちそうのなかにうまそうなササギ豆の煮たのが一皿ある。オドは「コリャ、ウメそうだ。あとでゆっくりくってやるべ」とニコニコしながら別の皿をたべながらササギ豆を見てはニコニコとお酒などをいただきながら、きげんよくお斎をいただいていた。

このムッツリやのオドの隣に世話好きで出しゃばりなオドが座っていた。このオドもササギ豆の煮たのが好きでこの皿を見つけると、「ホー、コリャウマそうだな。一番先にくうべ」といきなり皿をとりあげて一口たべ、「アッ、やっぱりウマイ」と、ムシャムシャと一皿たいらげてしまい、「アー、ウマかった」と舌なめずりしながら隣を見たら、ムッツリオドはササギ豆にまだ一箸も手をつけていない。「オヤ、おめえ、くわないの、好きでねえならおれがくってやる」と、いきなり手をのばして、アレッという間もなくムッツリオドのササギ豆の皿をとりあげ、たちまちたべてしまった。ムッツリオドは止めるひまもなく、ことわるひまもない。ムッツリオドはあまりのくやしさ、のこり惜しさに「ヒデーヤツだ、アンマリだ」と思い、何かいいたいがことばが見つからない。そうしているうちにお斎も終わり、みんなが立ち上がり、ムッツリオドもしかたなく立ち上がり帰り仕度をした。隣のオドは、立ち上がってムッツリオドといっしょに帰ろうと思い、ムッツリオドの立ち上がるのを見ていたら、ムッツリオドの袴の腰がグダッと下がっている。「ホラ、おめえの袴の腰がグダッと下がってる、なおしたらえべ」と腰に手をかけたら、ムッツリオドはその手をスゴイ力ではらいのけ、口をモグモグさせていたが、「ひとの袴が下がったって、ササギ豆くわねたって、えらね世話するな」と、ギロッとにらみつけた。隣のオドは何でおこられたかわからずにポカンと口をあけてオドの顔を見ていた。